

土着のモダン・デザイン

design

石斧を人類最初の道具とすれば、ひとをひとたらしめる条件こそデザインといえます。ものをつくったことはもちろん、それを介し環境を理解、制御せんとした意志こそ重要でしょう。

その地に根をおろすことは、どうじに互いを最適化するいとなみとなる。デザインの原風景であり、かわることない根本義です。

文明と文化

文明は文化をとびこえ、文化は風土にとどまる。

近代。それは文明的なるものを志向した時代。デザインもまた例外ではありません。しかし文明の到達たる道具インターネット／SNS は、いまなお世界は数多なる文化の集合体という、きわめて当然の事実をあきらかにしました。文明をつうじ文化とむきあう時代に、わたしたちは生きています。

では、文化におけるモダン・デザインとはなにか。風土によりかたちづくられた場と身体。そこに宿るモダニティとは、いったいなにか。

未然へかえる

つくり手つかい手。おのおのの日々。相互関係のなか、幾多のものごとが濾過され、結実した「かた」そして「かたち」となる。

わたしたちの暮らす潤質な風土は、個々の境を曖昧とします。

谷崎潤一郎『陰翳禮賛』にある羊羹のはなし。室内の闇。その断片を口に含むことで、みずからもまた、その場と時間のなかへ溶けてゆく。

いちど分別した対象へ、あらためて還ること。

未然への孵り。アンビエントなる状態。

百工がデザインしたもの。それは種々の道具であり、わたしたちがそれを介し、場へ即してゆく過程なのかもしれません。